

CT・MRI 実践の達人

聖路加国際病院放射線科レジデント 編

＜書評者＞ 杉村和朗（神戸大学病院長/
神戸大学大学院教授・放射線医学）

胃透視を行うにあたっては、まずはバリウムを作るところから始まり、配合、濃度、添加物、それに加えてフィルムや増感紙についても医師によって好みがあった。単に好みという訳ではなく、エキスパートといわれる医師の写真は明らかに優れていた。透視技術だけではなく、事前の準備やベテラン技師による撮影条件のさじ加減が、二重造影の質に大きな差を与え、診断能に大きく影響していた。画像診断医は単にできあがった写真を読むのではなく、優れた診断ができる写真を手に入れるところから始まっていることを、身をもって教えられていた時代である。

本書の責任編集者である齋田幸久先生といえば、胃透視の第一人者であり、多くの著書や論文を出しておられる。写真を撮るのは技師任せ、できあがった画像をモニターで診断するだけの診断医では高度な診断ができなくて常々おっしゃっている。従来の画像診断に比べて、CT、MRI は簡便になっているととらえられがちであるが、患者からいかにして優れた情報を引き出すかによって、診断能が大きく変わってくる。優れた診

断を行うには、豊富な経験と知識を基に、CT 並びに MRI に習熟した技師をはじめとする医療スタッフとの協力関係によって、診断に適した画像を得ることが不可欠である。齋田先生の、「優れた画像診断を行うには、読影に足る画像を得たうえで、豊富な知識と経験が不可欠である」というマインドは、聖路加のスタッフ、レジデント、医療スタッフに浸透している。それを石山光富医師という優れた診断医に引き継がれ、診断部の仲間を巻き込んでそのマインドを1冊の書にまとめあげたのが本書である。

CT は広範囲を高速で撮影できるようになったが、目的部位の情報をうまく引き出すためには撮影プロトコルの設定がより高度になっている。また MRI はさまざまなコントラストの画像が得られるが、これをさまざまな方向で撮像したり、拡散強調像や、MRA といった画像、脂肪抑制などを行うと、撮像時間も長くなり、出てきた膨大な情報に流されてしまうことがしばしば見受けられる。とりあえずあれもこれも撮像するのではなく、必要性を吟味しながら画像を得ることによって、読影レベ

ルは格段に上がってくる。本書は、CT については一般的なプロトコルを提示した上で、目的、特徴、基本画像、3次元像などのための追加作成画像へと進められている。MRI については、一般的なプロトコルをまず提示し、個別に対応するために、目的、撮像法の特徴、撮像時間、追加検査と続いている。撮像の特徴を知ったうえで、20分前後の検査時間を目安に、どういった場合にどの検査を省くか、どの検査を追加するかなどが、豊富な知識と経験を基に述べられている。

鎮痙剤の使い方、造影のタイミングや疾患ごとの注意点など、コンパクトにまとめられている中に、重要なさじ加減が散りばめられている。このように、本書は撮影現場のみならず、救急、あるいは外来で CT や MRI をオーダーするときに、優れた画像を得て正しい診断に至りたいという目的を満たすことのできる、必須の書であると考え推薦する。このような書を世に出すきっかけとなった齋田先生の教育に対する情熱、それを受け止めて優れた内容にまとめた石山医師を始め、関係者のご努力に感謝する。

●A5 頁224 2012年
定価3,780円
(本体3,600円+税5%)
[ISBN978-4-260-01475-5]
医学書院刊